

## 戦後初期日本におけるプロレスの生成に関する一考察 —1950年代におけるプロ柔道の展開に着目して—

塩見 俊一\*

日本においてプロレスは戦後大衆娯楽として成立し現在まで命脈を保つものであるが、その生成過程についてはこれまで力道山とテレビによる影響が強調されており、他の要因についても指摘されてはいるが十分とはいえない。そこで本研究では、1950年に柔道家を中心として組織された国際柔道協会によるプロ柔道の成立、活動、終焉の過程を考察し、日本におけるプロレスの成立に関する新たな知見を提供したい。プロ柔道は柔道の試合を観客に見せることを目的に行い、ルールの変更や映画や音楽など他の娯楽との結節などによって大衆娯楽としてある程度は成立しており、プロレスとの間に直接的な人脈上の連続性を持つものである。これらのことから①プロ柔道とプロレスの連続性は、プロレスの技術を海外から輸入する回路となっていたこと、②プロ柔道や後にプロ柔道家たちによって行われた興行が、日本におけるプロレス普及の下地となっている可能性があることなどの知見を得た。つまり、戦後日本における大衆娯楽の成立に、ごく短い期間ながら大衆娯楽として普及しようとした一部の武道や武道家が一定の役割を担っていたのである。

キーワード：戦後日本、大衆娯楽、プロ柔道、プロレス、柔道

### 問題設定

本研究の目的は、戦後日本における大衆娯楽の一つとみなされるプロレスの生成について考察することである。具体的には1950年に行われたプロ柔道とプロレスとの連続性を指摘し、プロ柔道が50年代中頃から60年代に大きなブームを巻き起こしたプロレスの生成に与えた影響を明らかにする。ここでいう大衆娯楽とは、限られた人ではなく多くの人々に広く受容され、また受容されることを目的に行われた娯楽のこ

とである。戦後の日本でプロレスは、ある時期において大衆娯楽の一翼を担うものであり、1954年から本格的に行われ、力道山の存在とともに爆発的な人気を集めるものとなり、現在までその命脈を保っている。

ところでプロレスの普及に関しては、力道山が中心となって設立した興行組織である日本プロレス興業株式会社（日本プロレス）によって、テレビという新しいメディアと全国を巡業可能な組織を後ろ盾としてなされたという説明が通説となっている<sup>1)</sup>。しかし新規な外来文化であったプロレスの大衆への普及については、上記以外の理由を見出すことも可能である。例えば1954年以前にも新聞には海外で行われたプ

\* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

プロレスに関する記事が掲載されており、ニュース映画でもプロレスは紹介されていた<sup>2)</sup>。また後述するように力道山以前にも海外でプロレス興行に参加した日本人や日本におけるプロレスやそれに類似した興行の存在は確認でき、これらのことが1954年からのプロレスブームの下地になっている可能性もある。加えて力道山個人やその周囲の組織の力、あるいはテレビによるものだけではないという指摘もなされつつある<sup>3)</sup>。吉見（2007）はこの点に関して、戦後日本の力道山ブームには、反米あるいはアメリカに対抗しうる日本、朝鮮半島出身者が演じる日本人、アメリカの体現者としての日本人というパフォーマンスが重層的に存在したと指摘している<sup>4)</sup>。

しかしながら、このような日本におけるプロレスの生成に関する多様性については、まだ十分に検討を加えられているとはいえ、未だ零れ落ちている注目すべき研究対象がある。その中でも、1950年に行われたプロ柔道は、日本におけるプロレスの成立および普及に寄与したと指摘しうる点があるにもかかわらず、その活動の実態について、管見の限りでは十分な考察が加えられているとはいえない。

本研究で扱うプロ柔道とは、1950年3月2日に結成式が行われた国際柔道協会による、柔道の試合を中心とした興行および選手であるプロ柔道家たちの諸活動の総体を指している<sup>5)</sup>。プロ柔道に関する記述は、日本におけるプロレスの黎明期にあたる1950年代前半の状況が語られる際に散見される。戸松（1970）はプロ柔道について「日本におけるプロレスの前身とも言うべき」ものとしてプロ柔道の重要性の端緒を指摘し、プロ柔道は「当時の講道館主流派との確執が、実力派柔道人をして」結成され、「芝スポ

ーツセンターで旗上げし、後樂園、三島、静岡、北海道などに興行を打った」ものの、興行をしくじり解散したとしている<sup>6)</sup>。また小島（1983）は、力道山以前にみられる日本人とプロレスの関わりについて述べる中でプロ柔道を取り上げ、プロ柔道がプロレスに影響を与えたことを示唆した上で「プロである以上、すごいものでなくてはならない」ルールや「白い柔道着に赤線の入ったカラフルな」道着に関する工夫、第1回興行の様子や「興行面に人を欠いた武士の商法」が災いしての解散と、その顛末を述べている<sup>7)</sup>。このようにプロ柔道の活動は、約半年という期間に行われた数回の柔道の興行とその失敗として述べられてきた。しかし本稿で見ていくように、プロ柔道の興行は柔道の試合を見せるだけのものではなく、プロ柔道家たちは興行以外にも多様な活動を行っている。またプロ柔道の終焉についても、当時の柔道界全体を取り巻く状況を含めて再検討を加えるべきである。そしてプロ柔道とプロレスの関係から、戦間期から戦時中においては思想善導に用いられた武道が戦後日本における大衆娯楽の成立に影響を与えた側面にも注視する必要がある<sup>8)</sup>。

本研究ではプロ柔道について、後に日本で行われたプロレスとの連続性に注目して論じる。まず、戦前までの日本におけるプロレスの事例を整理し、当時の柔道界を取り巻いていた状況について俯瞰する。次に戦後日本における大衆娯楽の復興に関して述べ、プロ柔道について、実施組織であった国際柔道協会の概要と活動の理念、興行の内容、映画との関わりを明らかにし、日本におけるプロレスの成立に果たした役割について述べる。そしてプロ柔道の終焉における経営面の失敗と周囲との軋轢について整理し、武道がプロレスの生成に影響を与えた面を

指摘し、プロ柔道からプロレスへの移行についても述べる。

本研究では当時の新聞や雑誌、興行や映画に関する資料などを中心に使用する。当事者や関係者の自伝の類、後にプロ柔道について述べられたものも使用するが、その際はその資料がどのような立場で作られたものであるかなどに注意し、客観的な解明に努めるものとする。資料から引用する際には旧字体は新字体に改め、それ以外は原文通りとする。なお本研究においてはプロレスという言葉を用いるに際しては、特にことわりがない場合、1954年から1963年頃まで、日本において力道山を中心に行われたプロレスという意味に限定して使用する。なぜなら職業的な格闘（professional wrestling）には広範な意味があり、本研究はその全てについて扱うことを目的としていないためである。また、日本におけるプロレスは現在まで様々な変化を経ているため、その黎明期と成立期として、日本における初期のプロレスの代表的な存在である力道山の存命中を一応の区切りとみなしておきたい。

## 1. 日本における戦前のプロレスと戦前から戦後初期の柔道

### (1) 戦前に見る日本のプロレス

レスリングは紀元前から行われ職業として行う者も古くからいたが、それは本研究でいうプロレスとは異なり、現在のショーアップされたプロレスは、レスリングがヨーロッパから南北戦争期を経てアメリカで流布しサーカスなどで行われるようになったことが起源であり、1880年代には現在に近い状態で成立していたという<sup>9)</sup>。日本人とプロレスの原型である欧米式のレスリングとの出会いは明治以前までさかのぼ

ることができるが、これらは外国人のレスリング経験者と主に力士が試合をしたという事例であり、プロレスの直接的な前史とはいえない<sup>10)</sup>。日本で初めて行われたプロレス興行といわれているのは、1887年行われた、渡米していた元力士の浜田庄吉と外国人選手によって、レスリングとボクシングが「外国相撲」として行われた事例である。しかしこの興行は当時の人々には受け入れられず、年内で活動を停止したという<sup>11)</sup>。

1921年にはアメリカからアド・サンテルが来日し、柔道との異種格闘技戦を行った。これは一般にも公開され、サンテルは柔道家との試合以外に同行したヘンリー・ウェーバーとレスリングの試合を披露している。当時サンテルはアメリカでプロレスラーとして活動していたため、サンテルとウェーバーによって行われたレスリングはプロレスにあたるものと考えられ、これも日本においてプロレスが行われた事例と言える<sup>12)</sup>。

1928年、大日本<sup>アマ</sup>レスリング普及会によってプロレスの興行が行われた。これはアメリカでプロレスラーとして活動していた三宅多留次が、大日本相撲協会の年寄、千賀ノ浦と協力し、外国人レスラーを招いて東京をかわきりに興行を打ったがどこも不入りで経営に頓挫し、この年の内に活動を終息したという<sup>13)</sup>。

1931年、早稲田大学に先述のサンテルが来日した際に戦った庄司彦男と柔道部の八田一郎が中心となって日本で初めてのレスリング部が設立され、6月10日に公開試合を行った<sup>14)</sup>。翌1932年には大日本アマチュアレスリング協会と大日本レスリング協会が発足する。大日本アマチュアレスリング協会はオリンピック出場を目指すために、アマチュアルールによる競技の推

進を行っていた<sup>15)</sup>。対して、大日本レスリング協会はレスリング講習会を行った際、技術指導の中にプロフェッショナルというものも含まれていたことから、プロも含んだ包括的なレスリングの推進を行っていたと考えられる<sup>16)</sup>。八田は当時レスリングについて、ヨーロッパを中心に行われているグレコローマンスタイルと、アメリカで行われているフリースタイルがあり、フリースタイルはフォールが1カウントで勝負が決するオリンピックスタイル、フォールに3カウントを要し大学で主に行われているカレッジスタイル、そして何でもありのプロフェッショナルに分かれると述べている<sup>17)</sup>。大日本レスリング協会がプロフェッショナルなレスリングの指導を行ったことは、当時の日本においてもレスリングがアマチュアとプロフェッショナルなものに分化しつつあったことを示している。

1936年にはアメリカのプロモーター、ルー・ダローが来日。当初の目的は相撲のアメリカでの興行実現だったが、それが頓挫すると日本人からレスラー候補をスカウトしようとした<sup>18)</sup>。翌1937年には職業レスリング協会がロス五輪にレスリング代表で出場した鈴木栄太郎と加瀬清を中心とし、先述のダローに協力を仰いで結成された。レスラーや柔道家が日本各地、朝鮮、満州から集められ、当時のアメリカで行われていたプロレスのルールを用い、興行が9月29日に洲崎大東京球場、10月13日にボクシングならびにスポーツ映画との合同で後樂園スタジアムにて行われた。しかし技術的に稚拙だったようで管見の限りその2興行のみで活動の記録は途絶えている<sup>19)</sup>。

以上の事例は、日本における第二次大戦までのプロレス、あるいは欧米のレスリングの足跡である<sup>20)</sup>。これらの事例は戦後日本で行われた

プロレスと直接的な連続性を持つものではない。ただ、三宅の弟子が後に力道山を指導し1954年以降に日本でレフェリーをつとめたことや、庄司や八田が戦後プロレスとの関わりを持った形跡があるなど、断片的な連続性は見られる。これらについて一定の留保は必要ではあるが、戦後力道山を中心に爆発的なブームを巻き起こしたプロレスと、戦前に行われたこれらの興行や諸活動の間に、明確かつ重要な意味を持つ連続性を見出すことはできない。

## (2)柔道を取り巻く状況

戦前の柔道は、井上（2004）によれば「見る武道」として、またメディア・イベントとして発展した側面をもっていた。当時講道館長であった嘉納治五郎は、一流の選手の試合を多くの人に見せることで大衆に柔道を理解させる必要性を感じ、その手段として催し事を利用し、1930年に全日本柔道選士権大会を開催した。嘉納治五郎はその他にも鏡開式や紅白戦を実質上の有料のイベントとして行った。有料のイベントには反対もあったが、嘉納治五郎は自給自足のためとしてこれを行ったという。また嘉納治五郎は全日本中等学校選士権大会を開催した際、大阪毎日、東京日日の両新聞社の後援をとりつけた。このように、柔道は観客を動員することができる「見る武道」として、またメディア・イベントとして発展し、入門者数の面でも飛躍的な成長を見せる<sup>21)</sup>。白崎（1987）によれば、1936年に福岡市で行われた第1回全国東西対抗柔道大会は、福岡日日新聞ならびに九州連合柔道有段者会が主催、講道館が後援し、普通席の前売り料金は1円50銭、20,000人収容の枚数が作られた<sup>22)</sup>。

武道は戦前から軍国主義的な風潮が強まるに

従い、国民総動員のためのイデオロギー装置に組み込まれ、それにより柔道も発展し1939年からは柔道および剣道が正課外の時間に尋常小学校、高等小学校の男児に対して指導されることとなったという<sup>23)</sup>。山本（2003）の大日本武徳会（武徳会）に関する研究によれば、時局が第二次大戦に向かうにつれて武道が思想善導に用いられ、武徳会は1942年に厚生、文部、陸軍、海軍、内務省共管による政府の外郭団体として戦時体制に組み込まれた。しかし総力戦体制下における戦局の悪化に伴い、武徳会の活動は銃剣および射撃術が重視され、かつ活動の規模も小さかった<sup>24)</sup>。

終戦を迎え、戦時中の武道統括団体であった武徳会は解散し、柔道は民間団体である講道館を中心に存続する。しかし柔道は学校教育から締め出され、指導者の多くは公職から排除されたため、柔道が本格的な活動を再開するのは講道館主催による戦後初の全日本柔道選手権大会が行われる1948年まで待たねばならなかった。翌1949年に講道館を母体とした柔道の統括団体、全日本柔道連盟（全柔連）が設立される。詳しくは後述するが、この過程で講道館と全柔連によって、柔道は体育であり、スポーツであるという面が強調されるようになる。同年、第2回の全日本柔道選手権大会も催され、国民体育大会のオープンゲームとしても柔道大会が行われた。同年10月に全柔連は柔道をスポーツとして定着させるために、「一般柔道競技者（アマ）と職業柔道家（プロ）に関する規程」を制定する。戦後復興の過程といえる当時、柔道家の活動は制限され生活に困窮する柔道家も数多くいたようだが、この規定によって、柔道家が収入を得る方法は非常に限定されたものとなった。そして1950年、第3回全日本柔道選手権大

会、国民体育大会柔道大会が行われ10月には柔道の学校体育への復帰が決まった。

以上のようにプロ柔道が行われた1950年の柔道は、目立った活動が行えなかった終戦直後の状況から脱し、学校体育への復帰そしてスポーツとしての柔道が強調され始めるという本格的な復興への過渡期にあり、同時に国家との繋がりを再び強め始める時期にあったといえる<sup>25)</sup>。

## 2. プロ柔道の活動とプロレス

### (1)大衆娯楽の復興

プロ柔道が実施された1950年当時、日本は敗戦後の復興が徐々に進められてきた時期であり、朝鮮戦争の特需が起こってからはその勢いを増すことになる。政治的には警察予備隊の創設による再軍備、レッドパージなど逆コースの動きが始まった時期でもあった。

この時期の大衆娯楽について松下（1960）によれば、戦時中、特に総力戦体制下においては娯楽が省みられることは難しく抑圧された状況が続き、戦後、天皇制体制思想の崩壊、アメリカニズムの流入、テクノロジーの発達と労働者および新中間層の増大によって、大衆娯楽は氾濫の時期を迎え、大衆は娯楽に対して受動的なだけでなく、積極的な参加者でもあったという<sup>26)</sup>。また福田（1953）は戦後の大衆娯楽の特色として、大勢の人が街に集まってやるヒマつぶしであること、進駐軍によってもたらされ支えられたアメリカ文化であるということ、スポーツが見物するものとして大衆娯楽の一つとなったことを挙げている<sup>27)</sup>。この点と関連して、1951年の読売新聞による東京、大阪、京都、名古屋、横浜、神戸の6都市の住民を対象とした調査によれば、人々が最も興味をもっている娯

楽は映画であり、以下僅差で演芸、音楽、読書、スポーツの順で続いている。また娯楽機関は十分にあるものの、娯楽のために全くお金を掛けない人が3割以上で、月に500円以上をかけている人は半数以下であり、娯楽に使う時間もお金も不足しているという<sup>28)</sup>。同じく読売新聞による全国に対する1955年の調査では、娯楽の中で映画演劇が最も好まれ、次いでスポーツが挙げられている<sup>29)</sup>。

これらのことから、当時の人々の娯楽に対する要求に以下のような傾向を見ることができると。第一に全体として映画が好まれ、また年を経るごとにスポーツも好まれるようになったこと。第二に人々は娯楽に対する要求を持っているものの、経済的、時間的な余裕は十分には持っておらず、安価で簡単に享受できる娯楽が好まれたということ。プロ柔道そしてプロレスはこうした時代状況の中で成立する。

## (2)活動の理念と参加者

本研究でいうプロ柔道とは、前述したように1950年3月に結成された国際柔道協会による、柔道の試合を中心とした興行と、協会への参加者のプロ柔道家としての諸活動のことである。プロ柔道の興行は管見のところ8回の開催が確認でき、興行の内容は柔道の試合を観客に見せるだけのものではなく、プロ柔道家は他の興行への参加、柔道の指導、映画出演も行っている。しかしこれらプロ柔道の活動に関する資料は1950年内で管見の限り途絶えており、活動は終結したと考えられる。

国際柔道協会の結成に参加した人々は、以下のような顔ぶれであった。木村政彦七段は戦前戦後を通して活躍した柔道家であり、初代全日本プロ柔道選手権を獲得するなど、看板選手と

なった<sup>30)</sup>。山口利夫六段も戦前から活躍し、木村と初代全日本プロ柔道選手権を争っており、郷里の静岡県三島市で興行が行われるなど、大きな役割を果たした一人である<sup>31)</sup>。ほかにも、選手として今村寿、坂部保幸、遠藤幸吉、高木清晴、市川登、大坪清隆、川口良男、宮島富男、渡辺利一郎、近藤舜などが参加した<sup>32)</sup>。

選手以外にも柔道家の重要な参加者がいる。理事となった牛島辰熊八段は、プロ柔道立ち上げの中心人物の一人であり、柔道が衰退していくことを憂い、人々に柔道を通して大和魂を復活させるべく、プロ柔道を計画した<sup>33)</sup>。木村は自伝『わが柔道』の中で、大学時代に牛島の私塾で生活し、二人の間には濃厚な師弟関係が築かれており、牛島が木村を勧誘したことでプロ柔道は実現、活動をはじめることになったと語っている<sup>34)</sup>。牛島は戦間期から戦時中にかけて皇宮警察、警視庁など国家との深い関わりを持つ施設や組織で柔道を指導していることから戦間期、戦時中の国家と接合した柔道の担い手の一人でもあったといえる<sup>35)</sup>。他に国際柔道協会の発足に関与した人物として、柔道家では顧問となつて道場を貸した飯塚国三郎十段、会長となつた杉浦和介、理事の寺山幸一、柔道家以外ではスポンサーとなつた高野建設社長の高野政造、理事長となつた森岡秀剛なる人物などがいた<sup>36)</sup>。

国際柔道協会の活動理念として、まず、プロ柔道の活動は当時生活に困窮していた柔道家に生活の道を与えることを大きな目的としていたことを挙げる。それは、選手へ報酬を与えることが明言されている点で明らかである。

「選手をABCの三級に分け固定給としてこの順に三万、二万、一万円を与え、後はファイトマネー

と賞金が出る、だから今度の大会で木村七段が優勝したとすると四月分の収入は五、六万円ぐらいになる」〔「プロ柔道 女子野球 お台所調べ」『読売新聞』、1950年4月15日付〕

このように、選手には給与が支払われ、試合毎のファイトマネーも支払われる予定であった。つまり国際柔道協会は、柔道家が柔道で生活の糧を得るために作られた組織であり、この目標を達成するには経営的に成功を収めなくてはならず、そのためにプロ柔道はそれまでの柔道とは異なった特徴を持つことになった。第1回興行前に掲載されたプロ柔道を扱った新聞記事には、それまでは少なくとも前面に押し出されることのなかった「見せるための柔道」という基本方針が挙げられ、理事長の森岡の談として以下のように述べられている。

「プロ柔道は興行である以上面白くなくてはならない、したがって<sup>マ</sup>審判規定や試合方法にも新機軸を出すつもりだ、例えば立ち業を主にするとか、引分の制度を廃止してあくまで勝負のつくまで闘うとかいつた<sup>マ</sup>風に持つていきたい」〔「柔道にもプロ時代」『朝日新聞』、1950年4月12日付〕

つまりプロ柔道は発足の時点で興行として成功を収めることが目標となっており、そのためにルールなどの試合の内容をも従来の柔道とは変容させていたのである。

また、国際柔道協会は当時柔道そのものが復興の過渡期であったことから、プロ柔道の諸活動を通してそれに寄与しようという理念も持っていた。当時、柔道の衰退に憂いをもっていた牛島は、木村が表紙となった雑誌に寄せた記事の中で以下のように述べている。

「現在彼はアマとかプロとかの問題を超越し<sup>マ</sup>切つて、自己完成のために猛稽古に汗を絞り、他をも完成せんがために柔道を奨励し、自他共に安心立命の境地に立たんとしているらしく思われる。」〔牛島（1950）、p.17〕

このように、プロ、アマの隔てなく柔道を通して自他共に成長し、柔道そのものを復興させるという理念も持っていたと考えられるのだ。

以上のようなプロ柔道の、ひとつはあくまで生活の術として柔道の魅力を高めることを求め、かたや自己及び他者の完成という、精神的な充足を求めるものであるという理念の性格は、プロ柔道の活動に大きな影を落としたと考えられる。興行的になかなか成功できなかったプロ柔道は、いわば困窮した柔道家を救うことができない状態であり、もう一つの理念である自他の完成はプロ柔道でなくとも可能である。そうすると柔道家がプロ柔道を続ける必要がなくなってしまう。そのため、プロ柔道参加者の中には後にアマチュアに復帰した者も居り、その一方でプロとして海外に活躍の場を求めた者も生み出した。このように、プロ柔道は柔道家が中心となって結成された国際柔道協会によって行われ、一つは柔道家が生活の糧を得るため、また一方で柔道全体の復権や普及のためという二つの理念を持って活動していた、といえるだろう。

### (3)興行

国際柔道協会は結成の後に約1ヶ月間、興行として魅力的な柔道を作り上げるための工夫した稽古を行い、第1回プロ柔道興行を4月16日、東京の芝スポーツセンターで行った<sup>37)</sup>。参加選手は当初22名だったが、4名脱落して興行

の当日には18名となった<sup>38)</sup>。その後、プロ柔道は5月27日に第2回興行を静岡県三島市の東海劇場、7月17日と18日に北海道の旭川市、同月29日と30日に函館市で興行し、次に9月24日に静岡県静岡市の静岡市公会堂で昼夜2回、そして9月30日に東京の後楽園競輪場で興行を行ったことが分かっている<sup>39)</sup>。

これらプロ柔道興行の会場のいくつかは他の大衆娯楽が行われた場所でもあった。東海劇場は当時、三島市で最も多く集客していた劇場であった<sup>40)</sup>。1947年から50年の3月までは三島労働文化会館の名で市民の娯楽の殿堂として機能し、映画、演劇、コンサートなどが行われていたという<sup>41)</sup>。静岡市公会堂も、戦後には市民の娯楽の殿堂として演劇、コンサート、スポーツのイベントなど多様な活動が行われており、最も大きいホールの固定席は1,216席だが、最大で5,000人を収容した記録もある<sup>42)</sup>。後楽園競輪場を含む後楽園球場周辺は、人々が数多くの娯楽に接することのできる場所であった。まず球場では野球をはじめ、サーカスやコンサート、ボクシングの試合やダンスパーティが催された。球場以外にも、戦前からの映画館や食堂、1946年にはマージャン、将棋、囲碁を行える遊技場、1947年には軟式野球場、1948年にはバレーコート、1949年には競馬の場外馬券売場が設けられ、同年11月3日に初の都営競輪が行われた<sup>43)</sup>。このようにプロ柔道は興行が行われた会場を見る限りでは、他の娯楽と同じように広く人々に楽しまれるものであった。プロ柔道第1回興行会場の芝スポーツセンターにはこのような特徴は見られないが、それ以降の興行会場のいくつかは大衆娯楽が行われる場所でもあったことから、プロ柔道は徐々に大衆娯楽としての性質を深めていったともいえるだろう。

プロ柔道興行の内容は以下のとおりであった。第一にプロ柔道の興行では柔道の試合が観客に見せるものとして行われ、プロ柔道家たちによるトーナメント、リーグ、ワンマッチといった形式の試合が行われていた<sup>44)</sup>。プロ柔道では当時講道館などの試合では禁止されていた指取りや脚の関節への攻撃、危険な投げ技を解禁し、立ち技を中心にした試合運びやそのための受身の研究など、ルール変更に伴った技術の工夫もされたようである<sup>45)</sup>。また、引き分けの撤廃や道着にラインを入れるなど、観客にわかりやすく、受け入れられやすくなるような工夫がなされたという<sup>46)</sup>。ちなみにプロ柔道の興行において、試合はプロ柔道家同士のみで行われただけではない。静岡市公会堂での興行では、当日、会場での飛び込み参加者を募集し、木村と試合をして飛び込み参加者が勝った場合には懸賞金10万円を贈呈するという賭け試合、賞金マッチが行われた。これは試合の前から新聞紙上で話題となり、『夕刊静岡新聞』の9月23日の記事では見出しに「懸賞金10万円の十人掛り」とあり、記事中でも「果して木村七段を破り10万円を獲得する人があるかどうか注目されている」と、興行の呼び物の一つとなっていた。

第二に、プロ柔道の興行は柔道の試合以外の娯楽を提供するものでもあった。静岡市公会堂で行われた興行では、映画俳優や歌手、漫談家や楽団を迎え、「歌い踊る豪華なアトラクション」が行われた<sup>47)</sup>。つまり、見せる柔道としての工夫と共に、柔道以外の催しを通じて観客を獲得しようと企てられていたのだ。

先述したように、柔道が戦前からメディア・イベントとして発展してきた経緯を見ることはできる。しかしながら、それはあくまで自給自足の手段であり、プロ柔道のように他の大衆娯



楽との共催やルールの変更など観客に見せることをここまで重視し、興行的な成功を目論んだものではなかった。このように、プロ柔道は興行を通して柔道を大衆娯楽として成立させようとさまざまな努力を行っていたのである。

#### (4)プロ柔道と映画の関係

プロ柔道の活動は柔道を中心にした興行以外にもいくつか見ることができる。それは、映画への出演、他の興行への参加、柔道の指導である<sup>48)</sup>。その中でここではプロ柔道家の映画への出演について検討する。なぜなら映画は当時の人々に最も親しまれていた娯楽であり、その映画への出演は他のプロ柔道の活動にも大きな影響を与えているからである。具体的には、1950年に前後編に分けて公開された松竹映画『春の潮』に、プロ柔道の人々が出演、参加している<sup>49)</sup>。春の潮は『姿三四郎』の著者としても有名な富田常雄が東京新聞に連載し、日比谷出版社より1950年3月31日に単行本として刊行された小説が原作であり、その単行本の発売前に松竹によって映画化が開始され、前編は1950年6月17日、続いて25日に後編が公開された<sup>50)</sup>。

まず、プロ柔道家のうち2名がこの映画に出演している。この映画には主人公らが柔道の試合を行うシーンがあり、そこで木村と山口が本人役で審判として出演している<sup>51)</sup>。また『松竹映画ウィークリー125号 春の潮特集号』によれば、牛島を含むその他のプロ柔道家たちもエキストラなどとして映画に出演し、俳優に撮影の前や合間に劇中で行われる柔道の試合のための技術指導を行い、国際柔道協会は特別出演および柔道指導となっている<sup>52)</sup>。

このプロ柔道家の映画出演と技術指導や特別出演がプロ柔道の興行にもたらした影響とし

て、映画への出演が契機となり、プロ柔道の興行は柔道の試合のみに収まらないものとなった可能性が指摘できる。先述したプロ柔道の興行に出演した映画俳優のうち若原雅夫、津島恵子、鶴田浩二は、この春の潮の出演者でもある。プロ柔道家たちとの映画での共演が、映画俳優がプロ柔道の興行に出演するきっかけのひとつとなったと考えられる。また映画出演はプロ柔道の人々が興行の中に歌や音楽、踊りを取り込むというアイデアと、それを可能にする人脈を得るきっかけにもなっただろう。

この他にプロ柔道家の映画出演が、プロ柔道興行の広告に利用されていたことを挙げる。プロ柔道第2回興行開催が新聞記事になった際、プロ柔道家が春の潮に出演した時の写真が使用されている。その写真は木村、山口が前列中央に座り、それを囲むようにして俳優が写っているものであり、記事中にも春の潮に木村、山口が出演したことや、俳優たちの名前が記されている<sup>53)</sup>。また静岡市公会堂での興行の際、興行を後援した『静岡新聞』、『夕刊静岡新聞』では記事や広告として7回告知が行われているが、その時にも俳優や歌手の名前が記載され、中にはプロ柔道家よりも大きなスペースをとっていることもあった<sup>54)</sup>。つまりプロ柔道の興行は俳優や歌手など知名度のある人々を広告に利用することで、より多くの集客を狙っていたといえる。そしてプロ柔道家自身も、少なくとも一部は映画に出ることで有名人としての付加価値を持つことができただろう。当時映画に出演するということは有名人になることにもつながり、その有名人が試合をしている姿を見ることは、プロ柔道興行の魅力の一つともなったであろう。

このように、プロ柔道の興行は柔道の試合の

みに収まらないものとして、少なくとも第2回興行以降は広く大衆の要求に応えようとしていた。これらのことが、プロ柔道興行の大衆娯楽としての性質を強めていった要因となったと考えられる。

#### (5)プロ柔道がプロレスの成立に果たした役割

プロ柔道の特徴の中でプロレスの成立に最も大きく影響を与えたと思われるものは、プロ柔道とプロレスの間に見ることができる人脈上の連続性である。プロ柔道家からは木村、山口、遠藤、市川、高木、大坪らがプロレスに転向しており、日本におけるプロレスの黎明期の決して少なくない数のプロレスラーがプロ柔道出身者なのである<sup>55)</sup>。1954年2月19日に行われた日本プロレスによる最初の興行には、木村はメインイベントに、山口はセミファイナルに、遠藤、大坪、市川もそれぞれ参加している<sup>56)</sup>。

この連続性はプロレスの技術の輸入においても大きな役割を果たした。木村と山口は1951年1月から5月にハワイで、柔道指導の他、プロレスも含んだ興行にも参加している。

「(前略) 興行は前半柔道の十人掛けをやったが、レスリングのやり方をおぼえあとはレスラーとの対抗戦をやった。(中略) 試合のやり方ははじめ相手も柔道衣を着てやり、二回目はともに裸でやる。柔道衣でやるときは一本とってもだめで『参った』といわせるので、これは首をしめてとったが、レスリングのときはフォールされた。ける、なぐる、飛<sup>マ</sup>上がって足で胸板を蹴るという反則お構いなしの無茶をやるのが習いらしく、これには驚いた。(後略)」[「プロ・レスラーにも大勝“ハワイ柔道行脚” 木村七段の土産話」『朝日新聞』、1951年6月1日付]

文字通り身体でプロレスを覚えた木村と山口は、その後ブラジル、アメリカからカナダ、メキシコへ共に遠征しプロレスの試合を行い、1952年にアメリカに渡った際には二人一組で戦うタッグマッチも行き、1万人の観客の前での試合も行っていたという<sup>57)</sup>。これによって木村と山口は、同時期に渡米していた力道山に劣らないほどのプロレスの技術を得ていたといえる。遠藤は力道山と共に1951年に日本で外国人選手を中心に行われたプロレスの興行に参加、トレーニングと試合を行い、1952年に渡米しプロレスラーとして活動し、力道山と合流して日本プロレスの旗揚げに参加している<sup>58)</sup>。

このようなプロ柔道とプロレスの連続性とプロ柔道家によるプロレスの技術の輸入は、日本におけるプロレスの成立に大きな意味を持ったと考えることができる。木村、山口、遠藤のプロ柔道出身者はアメリカで直接プロレスの技術を身に付けた。それによって彼ら自身がプロレスラーになりえたことに加えて、彼らを介して多くの人がプロレスの技術を習得することが可能となった<sup>59)</sup>。また日本におけるプロレスの人気を高めた要因として日米対抗の図式が挙げられることがあるが、その日本人側の人材をプロ柔道出身者も担っていたのである。

### 3. プロ柔道の終焉

プロ柔道の国内での組織的な活動は、管見の限り1950年10月以降には見るができない。その原因としてこれまで経営の悪化と、他の柔道団体からの圧力が挙げられてきた。確かにこの2点はプロ柔道の活動の終焉に大きく関わっていると思われる。そこで本章ではこの2点について個別に検討し、それら相互の関連を踏ま

えたうえでプロ柔道終焉の事情について整理する。そしてプロ柔道の終焉とプロレスの生成との関係から、武道が戦後日本における大衆娯楽の成立に与えた影響についても指摘したい。

#### (1) 経営の悪化と人材の流出

これまで述べてきたように、プロ柔道の活動は大衆娯楽としての特徴を有するが、しかし活動は短期間で終了し大衆娯楽としてあるいは他のかたちであっても後に残る事はできなかった。プロ柔道の経営的な失敗は、その活動の理念から見ても終焉の大きな原因となったに違いない。それぞれの興行における詳しい入場者数は現在のところ不明だが、第1回興行に関しては500人から4,000人といわれており、これは決してはかばかしい集客とは言えない数だったようである<sup>60</sup>。この興行の内容について、新聞は「アッケなく」「予想通り」という言葉を用いて木村の優勝を伝えており、魅力的なものとはしていない<sup>61</sup>。またスポンサーとなった高野建設は、第1回興行の失敗を受けて早々に手を引いてしまったという<sup>62</sup>。これにより、国際柔道協会が当初予定していた選手に固定給とファイトマネーを与えるという経営は行き詰まり、プロ柔道家たちの生活を困窮から救うということをし難くしたと考えられる。これが国際柔道協会からの人材の流出につながり、組織としての活動の継続を難しくしたのである。

木村、山口、坂部は1950年6月末に米国柔道協会から招聘を受け、10月にハワイに渡ることになった<sup>63</sup>。木村らが8月に相撲の大会に渡米柔道選士として出場した際、高野（当時は会長）と理事の牛島は木村らの渡米の予定はないとこの報道を否定するも、結局3名の渡米計画は事実と判明し渡米の歓送会としてプロ柔道興

行が二度行われた<sup>64</sup>。しかし国際柔道協会は木村らとの間に雇用契約を結んでおり、勝手な海外渡航ならびに他者との契約を木村らの雇用契約違反であるとして東京地裁に訴え、それによって木村らの渡米時期は大きく遅れ、翌1951年1月20日となった<sup>65</sup>。この3名のプロ柔道家の国際柔道協会からの離脱と海外渡航は、高段者であり有名選手でもあった人材の流出、および国際柔道協会の組織的な混乱を招いたという点で、プロ柔道の継続を難しくした理由となっただろう。

#### (2) 講道館及び全柔連との軋轢

既に述べたようなプロ柔道の諸活動は、他の柔道団体との間に軋轢を生む原因ともなった。国際柔道協会が活動していた時期、日本において柔道は講道館と全柔連によって統括されていた。全柔連は1949年5月6日、柔道有段者会を発展的に解消し新たに作られた柔道の統括組織であるが、実際は講道館を中心に作られたもので、同年10月27日、日本体育協会（体協）に仮加盟した。この際に、全柔連によって体協のアマチュア規定を参考にして作られたものが、「一般柔道競技者（アマ）と職業柔道家（プロ）に関する規程」である。同年10月30日の全柔連秋季理事会で制定されたこの規定は15条と附則から成っているが、どのような行為をすればプロの柔道家とみなされるか、という規則についての条文を以下に抜粋する<sup>66</sup>。

「事情を知り職業柔道家と競技したる者（3条）、  
「(表彰の際に) 不当に高価な物品又は額の多少を問はず現金を受け取る（者）（5条）」、「観衆より出された賞金の類（を受け取る者）（6条）」、「自己の競技に金品を掛けて競技した者、若しくはそ

れに関連してなされた賭博に係る者（7条）、「物質的所得を目的として柔道の競技又は演技を行う者又は同じ目的で他の競技者をして行わしめる者（11条）」、「柔道対柔道の他柔道と異種〔例えば相撲・レスリング・ボクシング等〕の職業競技者と共同して興行を計画実行する者（12条）」、「映画演劇放送等に於てこの方面の職業人と共に報酬を受けて出演したる者（中略）その他柔道に於ける名声を利用して金銭的利得を図りたる者（13条）」、「物質的所得を目的として柔道について指導をなす者（中略）但し学校官庁会社等に於て体育担当者として勤務し柔道を体育の一科目として指導するものは除く（14条）」、「町道場を経営しその道場を維持するために必要な経費以外の利得を得る者（15条）」

プロとアマチュアの判定は全柔連のアマチュア資格審査委員会によって行われ、一旦プロとなった者のアマチュア復帰は原則として認められず、プロ選手はアマチュア団体が催す大会等への選手、審判としての参加を禁じられた。

このような厳しい規定が作成された理由の一つとして、当時の日本の柔道が目指したスポーツ化と、その牽引役としての講道館および全柔連の役割をあげたい。当時、柔道は戦前からの武道というイメージからの脱却を図り、スポーツとして普及を目指そうとしていた側面があり、これは講道館と全柔連が中心になって推し進められた。武徳会の解散により講道館は民間の組織として柔道を掌握したが、当時の講道館長、嘉納履正は以下のように述べている。

「(前略) 真に日本の国民性に根ざした立派なスポーツである柔道は目覚ましい復興を示している(中略) 講道館柔道が、体育としてスポーツとして又

防衛の術として更に其原理を社会生活に応用する大きな道として、世界の人々に高く評価されている証拠でありまして、所謂偏狭な武道といふ様なイデオロギーを脱却した、合理的な世界のあらゆる人々に理解出来る価値ある内容を有している(後略)」〔嘉納（1949）、p.1。〕

このように嘉納履正は、柔道は護身術や生きるための「道」としても機能しているとしながらも、戦前、戦中の国家のイデオロギー装置となった武道ではなく、体育、スポーツとして普及すべきものであると考えていたのだ。この大会の翌日に全柔連が結成されるが、全柔連の会長は嘉納履正であり、この点からいっても講道館と全柔連は両輪となって当時の日本の柔道界を牽引し、その先にはスポーツとして柔道を普及させるという目的があり、そのためには体協への加盟は必要なことであった。体協に属することで、国民体育大会やオリンピックへの参加の道が開けることがその大きな理由となったであろう。そして体協はプロ選手を認めないという立場を取っていたため、加盟を目指す全柔連も明確にその立場を示す必要があったと思われる。少なくとも講道館および全柔連の見解としては、1949年には日本の柔道界にプロ団体、プロ選手はなかった<sup>67)</sup>。そこで全柔連は、先に挙げたようなプロとアマチュアを厳しく分ける規定を設けることで体協加盟、ひいては柔道がスポーツとして国内外で活動する道を模索していたのではないだろうか。

この規定は、全柔連および講道館が柔道の統括団体として、スポーツ、体育としての柔道の発展と普及を目指してつくられたものであるといえるだろう。しかしこの規定は、市井の多くの柔道家たちを生活の困窮から救うものではな

く、むしろ深めるものであった。規定を遵守すれば、柔道家は学校や企業に体育の指導者として勤務する以外に柔道家として収入を得る方法はない。しかしながら、当時学校における柔道は禁止されていたため、ほんの一握りの者しか柔道から生活の糧を得ることはできないことになる。当時は戦後の復興期であり、生活の糧を他の仕事などで得て、さらに柔道を行う余裕のある者が多数いたと考えるのは難しいだろう。

このように、全柔連の結成と体協への加盟、それに伴う柔道のスポーツ化の推進という潮流の中で、プロ柔道は誕生する。当然、講道館や全柔連からは大きな圧力があったと考えられるが、しかし、少なくともプロ柔道の発足当時、講道館や全柔連はプロ柔道の存在を否定せず、アマチュアとプロの区別を明確にした上で、その活動を奨励する発言なども見ることができる。嘉納履正は全柔連の幹部からプロ柔道団体と講道館の立場について問われた際の私見として、以下のように述べている。

「時代の進展と共にプロ柔道団体が結成されるべき事は当然な成行であつて拳闘其の他のスポーツ界の現状より見て、むしろ遅かつたとも言ひ得るのである。(中略)正しいプロ柔道団体の結成が、柔道の普及奨励に大きな役割を有つ事は予見出来る事であつて、講道館設立の目的の一つが、柔道の普及発達にある事を思へば、正しいプロ柔道団体に対し好意を示し、正しい育成に努める事はその任務の一つとも言へよう。(後略)」〔嘉納 (1950a), pp.26-27〕

他にも、プロ柔道の旗揚げ戦を報じる新聞や第3回の全日本柔道選手権大会での挨拶でも、プロ団体を容認する発言をしている<sup>68)</sup>。また、新

聞に掲載された講道館関係者の発言として、プロ柔道を容認し、健全な発展には協力を惜しまないというものもある<sup>69)</sup>。

しかし、プロ柔道の活動について批判的な意見もある。それは当時の柔道関係者による、全柔連主催となった第3回全日本柔道選手権との対比というかたちで語られたものである。

「考へさせられた事は先月のプロ試合大会が約四千人の入りであり、今次のアマの大会は超満員であつた事である。(中略)他の競技はいづれもプロはアマからその地位において軽く低く見られがちの事が少なくないが、柔道では先生は師範である。必しも力の高下のみによりて優劣を断じない。」〔下村 (1950), pp.7-9〕

「(第3回全日本柔道選手権は)試合前に、すでに満員であった。さきに、同じスポーツセンターで、第一回のプロ柔道大会が開かれたが、その人気とは問題にならない。これをみると、プロ柔道の貧弱さもあるが(後略)」〔高橋 (1950), p.11。( )内筆者。〕

このように、成功したアマチュアの大会と失敗したプロ柔道の興行という視点での批判が加えられている。これらからは、嘉納履正が見せていたようなプロ柔道に対する一応の理解や健全な育成の援助という態度を見ることはできない。嘉納履正も先に挙げた記事の中で、柔道がみだりに見世物になることや、講道館がプロとして興行を行うことは慎むべきであるとしている<sup>70)</sup>。このように、講道館と全柔連はプロ柔道の活動について一定の理解と容認を与えていたが、実際にはプロ柔道は講道館や全柔連からは積極的な協力を得るまでには至らなかったと考

えるべきであろう。むしろ全柔連が柔道をスポーツ化し復興しようという理念から規定をつくることにより、柔道家がプロの道を選ぶことを非常に困難なものにしていったことは、プロ柔道の活動の大きな阻害要因となったであろう。

柔道は戦間期から戦時中において武道のひとつとしてイデオロギー装置に組み込まれ、思想善導に利用されたが、そうすることで柔道自体も発展を遂げた。戦後、柔道は進駐軍による学校教育や公的機関からの排除によって一時は衰退するものの、民間組織であった講道館によって復興がなされる。プロ柔道はその過渡期において、大衆娯楽として柔道を復興しようとしていたのである。しかし同時期に講道館、全柔連によって柔道のスポーツ化と教育の場への復帰が画策され、再び柔道は国家とのつながりを強めていった。いわばこの柔道における逆コースの潮流は、プロ柔道が大衆娯楽化した柔道として存続することを難しくしたのである。しかしプロ柔道は後に新規な外来文化であったプロレスと接合することで、戦後日本における大衆娯楽の成立に影響を与えている。プロ柔道は武道がごく短い期間ではあるが大衆娯楽として成立しようとし、それが後の大衆娯楽の成立に影響を与えた稀有な事例なのである。つまりプロ柔道とプロレスとの関係は、戦後日本における大衆娯楽の成立と武道との間にパラドキシカルな連続性があることを示唆している。戦間期、戦時中には思想善導に用いられイデオロギー装置にもなっていた柔道の担い手たちが、戦後日本における大衆娯楽の担い手となり、その成立に積極的に役割を果たしていたのである<sup>71)</sup>。

このように、プロ柔道の終焉はいくつかの要因が相互に関連して起こったものである。まずプロ柔道の興行は少なくともその初期には成功

を収められず、その後、興行内容は集客を狙うものになっていったが、興行が大きく成功したかどうかは定かではない。そして柔道のスポーツ化を推し進める講道館および全柔連は厳格にプロとアマチュアを規定し、プロ柔道の活動に協力をするまでには至らず、教育の場への復帰など、国家との繋がりを回復するような柔道界の動きは、大衆娯楽として柔道を普及しようとしたプロ柔道の活動を封じ込めるものになっていった。これにより国際柔道協会の経済的な困窮は深まり、柔道家の生活を救うという目標を果たすことができなくなり、選手の一部が国際柔道協会から離脱、独自に収入を得る道を模索したことがプロ柔道を人材不足に陥れ、彼らの離脱に関連する騒動と混乱は、国際柔道協会が組織として活動を続けていくことを難しくしただろう。

### (3)プロ柔道からプロレスへ

プロ柔道の組織的な活動の終焉後、数名の人々がプロ柔道家、プロレスラーとしての活動を国内外で開始するが、これはプロ柔道とプロレスを繋ぐ活動にもなっている。プロ柔道の発足時からレスラーとの対戦に興味を持っていた木村は、先述の通り海外においてプロレスの技術を習得している<sup>72)</sup>。木村は山口と共に1952年にアメリカに渡った際、日系人で元レスラーのラバーメン樋上氏によって本格的にプロレスの技術を習得したという<sup>73)</sup>。木村の海外での活躍は時折新聞で紹介されており、プロレスを日本へ紹介する役割を果たしていたと思われる<sup>74)</sup>。

山口はより直接的に日本にプロレスを紹介した。木村と共にハワイ、ブラジル、アメリカと遠征した山口は、1953年7月、後にプロレスラーとなった元力士の清美川とともに柔道と相撲

の異種格闘技戦を大阪で行い、12月には全日本プロレス協会を設立し興行を行った<sup>75)</sup>。その全日本プロレス協会は力道山らに先んじて、翌1954年2月6日と7日に「マナスル登山後援募金、在日米軍対日本のプロ・レスリング試合」を大阪で2日間行い、この興行は日本人とアメリカ人がプロレスのルールで戦っており、試験電波で関西から静岡県まで実況中継が行われている<sup>76)</sup>。

遠藤もまた、先に述べたようにプロ柔道からプロレスへの移行期に活動した。1951年に在日アメリカ人慈善団体のトリー・シュライナーズ・クラブによってプロレス興行が開催され、9月30日に行われた興行が戦後日本におけるプロレスの初公開であるとされている<sup>77)</sup>。遠藤は力道山と共にこの興行後に練習に加わり、11月27日に仙台でプロレスデビューを果たしている<sup>78)</sup>。遠藤は翌1952年に渡米してプロレスラーとして活動し、力道山が旗揚げした日本プロレスへ参加した<sup>79)</sup>。

市川はプロ柔道終焉後、柔道とボクシングおよびレスリングの異種格闘技興行である「柔拳」に参加した。小泉（2002）によれば、柔拳は戦前にも嘉納健治によってボクシング普及のために行われていたが、戦後の柔拳はこれと繋がりはなく、柔道家の木島幸一七段と、女子プロレスを主催していた中村守恵が興したものであり、各地で興行を行ったが1954年以降はプロレスに人気、人材共に吸収されて活動を縮小し、柔拳としばしば共催していた女子プロレスがその後現在まで残っている<sup>80)</sup>。この柔拳の興行には木村も参加したことがあるようで、その他にも後にプロレスラーとなった人々が参加している<sup>81)</sup>。

このようにプロ柔道家たちは海外での活動に

よってプロレスの技術を身に付け、プロレスあるいは柔拳の興行を通して日本におけるプロレスの前史を作り上げていった。これが日本人プロレスラーを育成し、外来文化としてのプロレスを紹介することに繋がっていったのである。

## 結 語

本研究では、戦後日本の大衆娯楽のひとつであるプロレスの成立にプロ柔道が与えた影響について検討した。そこでプロ柔道について以下の点が明らかになった。第一に、プロ柔道は柔道関係者を中心とした組織によって行われ、柔道家の生活困窮を救うことと柔道全体の復興を目指していたこと。第二に、会場や興行の内容、映画出演など他の大衆娯楽との結節を持つことで、プロ柔道は大衆娯楽として柔道を普及させようとしていた面があること。第三に、プロ柔道の終焉については当時の講道館、全柔連が推し進めた柔道のスポーツとしての普及と教育の場への復帰が圧力となり、かつ経営的な失敗もあって人材が流出したことが原因となっていること。第四にプロ柔道家の中には後にプロレスラーになった人々があり、海外におけるプロレスの技術の習得、国内におけるプロレスやそれに類似した興行を力道山がプロレスを行う以前に行っていたこと。

つまりプロ柔道は、次の2点において戦後日本におけるプロレスの生成に強い影響を与えている。①プロ柔道はプロレスとの間に連続性をもち、プロ柔道家たちによってもプロレスの技術は日本に持ち帰られていたこと。②プロ柔道家たちによる新興のプロレスや格闘技の興行が、プロレスの成立と普及の下地となった、という点である。このように、日本におけるプロ

レスの前史とその成立にはプロ柔道が一定の役割を果たしている。つまり、戦後日本における大衆娯楽の成立に、ごく短い期間ながら大衆娯楽として普及を目指した一部の武道や武道家が影響を与えているのである。

本研究においてはプロ柔道の成立および展開と、プロレスの生成との関わりについて検討したが、1950年代後半からのプロレスの隆盛を対象とするものではない。この点は今後の課題としたい。

## 注

- 1) このようなプロレスの普及については、〔芝山 (1981), pp.136-139〕のように指摘され、テレビなどによって繰り返し語られることで通説となっている面がある。
- 2) 海外でのプロレスに関しては〔『読売新聞』1910年4月8日付, 1919年4月7日付〕など海外での日本人柔術家の活躍や〔『読売新聞』, 1925年1月11日付, 1934年3月12日付, 1935年9月3日付, 1937年1月30日付〕のようにアメリカでのプロレスの試合やランキングについての記事がみられる。ニュース映画でプロレスがどの程度放映されていたかは定かではないが、〔菊間 (1952), p.24〕に「レスリング? ニュース映画などに出てくるあのすごいやつだろう。筋肉隆々たる巨人がパンツ一つの裸体で踏んだり蹴ったり殴ったりリングの外へ放り出したりするやつさ…」とある。
- 3) 古川 (2002) はプロレスと相撲と浪曲について人的連続性から興行としての類似性を指摘している。また、吉見 (2001) によればプロレスは「けばけばしい俗悪姓を持つ」ポピュラー文化として普及し、「異種混交的な通俗性 (banality) としてのアメリカ」として存在し、エリート層のみではなく大衆をアメリカに吸い寄せせる力を持ったという。
- 4) 吉見 (2007), p.178。
- 5) 資料によっては「国際柔道クラブ」、「プロ柔道協会」とされていることもある。
- 6) 戸松 (1975), pp.194-195より引用。
- 7) 小島 (1983), pp.164-168より引用。
- 8) 〔井上 (2004), pp.2-7〕によれば、武道とは武術が明治以降に近代化することで生まれたものであり、その過程の時期にあたる明治初期、武道の前身である武術の一つ、剣術を興行化した撃剣会や、柔術、馬術も興行化したことがあった。
- 9) プロレスの起源については〔流他 (2002), pp.218-220〕によれば、少なくとも1880年代には4本のコーナーの間にロープを張った四角いリングの上で行われ、観客に見られるという現在に近い形が成立していたという。
- 10) 〔小島 (1983), pp.18-42〕, 〔ベースボールマガジン社 (1995), pp.10-13〕, 〔『読売新聞』, 1987年1月24日付〕。
- 11) 〔小島 (1983), pp.54-64〕, 〔『読売新聞』1887年4月29日付, 5月3日付, 5月5日付, 5月6日付〕。
- 12) この顛末については〔丸島 (2006)『講道館柔道対プロレス初対決』〕が詳しい。
- 13) 小島 (1983), pp.140-154。
- 14) 『読売新聞』, 1931年4月28日付。
- 15) 『読売新聞』, 1932年4月23日付。
- 16) 『読売新聞』, 1932年4月16日付, 7月23日付, 7月28日付。
- 17) 『読売新聞』, 1934年3月31日付。
- 18) 『読売新聞』, 1936年5月28日付。
- 19) 『読売新聞』, 1937年7月30日付, 9月23日付, 9月28日付, 9月30日付, 10月10日付, 10月12日付, 10月15日付。
- 20) 相撲は日本で当時行われていた職業的なレスリングの一形態ではあるが、ここでは当時の外来文化としてのレスリングおよびプロレスについて述べているため、本稿では扱わない。
- 21) 井上 (2004), pp.136-151。
- 22) 白崎 (1987), pp.127-130。
- 23) 井上 (2004), pp.152-155。
- 24) 山本 (2003), pp.103-117。
- 25) 柔道の戦前における状況はここで述べたのみではないが、本研究に関わりのある点が見られる時期として、第一次大戦後を中心に述べている。



- 26) 松下 (1960), pp.19-50.
- 27) 福田 (1953), pp.10-15.
- 28) 『読売新聞』, 1951年12月3日付。
- 29) 『読売新聞』, 1955年8月24日付。
- 30) 木村については1985年に発行され2001年に文庫化された自伝〔木村 (2001), 『わが柔道』〕が詳しい。
- 31) 山口利夫は早稲田大学で戦前から活躍した柔道家で、戦後に郷里の静岡県三島市に戻り〔三島柔道会 (1997), p.16〕によれば三島柔道会の設立に理事および指導役として参加している。
- 32) 木村, 山口, 遠藤, 今村, 坂部は〔『毎日新聞』, 1950年4月17日付〕の試合結果に、高木, 大坪, 市川は〔小島 (1983) p.175〕に、川口は〔『柔道通信』, 1952年4月30日付〕に、宮島は〔『アサヒグラフ1954年11月3日号』, p.10〕に、渡辺は〔柔道大事典編纂委員会 (1999), p.378〕に、近藤は〔『週刊サンケイスポーツ1958年9月10日号』, p.54〕にそれぞれプロ柔道に参加していたことが記載されている。
- 33) 牛島辰熊先生古希記念会 (1974), pp.164-166.
- 34) 木村 (2001), pp.159-160.
- 35) 牛島辰熊先生古希記念会 (1974), p.161.
- 36) 〔『朝日新聞』, 1950年3月1日付, 4月12日付〕, 〔『静岡新聞』, 1950年9月3日付〕。
- 37) 小島 (1983), p.165.
- 38) 『朝日新聞』, 1950年4月17日付 (写真①)。
- 39) 北海道での興行については〔『夕刊函館新聞』, 1950年7月17日付, 7月30日付〕, 〔松崎 (1950), pp.10-11〕, 〔柔道大事典編纂委員会 (1999), p.379〕参照。
- 40) 〔三島市役所産業課 (1953), p.30〕によれば、1952年度の東海劇場の入場者は三島市にある映画館の全入場者数の3割強を占め、最も多く集客している。
- 41) 土屋他 (1989), p.239.
- 42) 〔山内 (1988), p.25〕, 〔静岡市役所文書課 (1954), pp.84-86〕。
- 43) 株式会社後樂園スタジアム社史編纂委員会 (1963), pp.186-196, 212.
- 44) 『毎日新聞』, 1950年4月17日付。
- 45) 〔『朝日新聞』, 1950年4月12日付〕, 〔柔道大



写真① 第1回プロ柔道興行の様子  
出典：『朝日新聞』, 1950年4月17日付

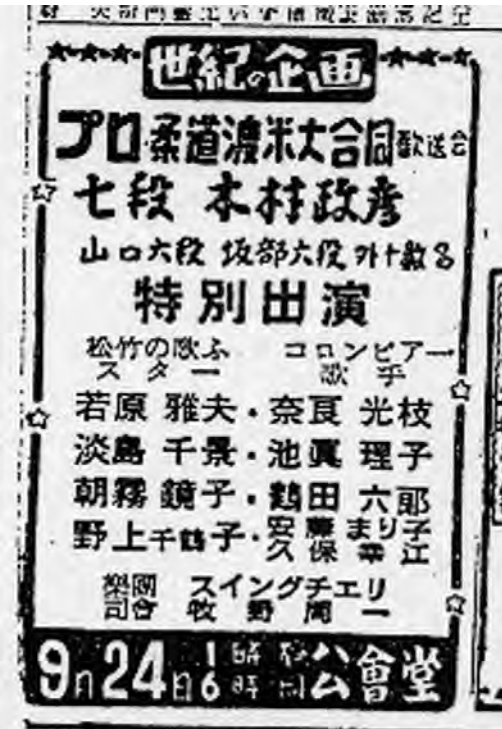
- 事典編纂委員会 (1999), pp.378-379〕。
- 46) 小島 (1983), pp.165-196.
- 47) 『夕刊静岡新聞』, 1950年9月18日付。
- 48) 他の興行への参加については, 〔『静岡夕刊新聞』, 1950年9月3日付〕に、8月27, 28日熱海市小公園で行われた相撲大会に木村, 山口, 坂部が出場したとある。柔道の指導については〔三島柔道会 (1997), p.23〕によれば、山口が参加していた三島柔道会が1950年4月21日に木村, 坂部を招き、指導を受けている。報酬の有無は不明だが、時期的にプロ柔道家としての活動であると考えられる。
- 49) 春の潮以外に〔毎日新聞社 (1950), p.304〕によれば、1950年4月9日公開の新東宝配給映画「銀座三四郎」にも出演したという。しかしこの映画は当初1950年1月29日に封切りが予定されていたため、国際柔道協会の参加者としてプロ柔道家が参加した可能性は少ない。
- 50) 〔『読売新聞』, 1950年3月25日付, 6月17日付, 6月25日付〕, 〔富田 (1950)〕。
- 51) 『夕刊静岡新聞』, 1950年5月24日付。
- 52) 『松竹映画ウィークリー 125号 春の潮特集号』の特別出演の項に「柔道指導 国際柔道協会 牛島八段 木村七段 他所属選手数十名出演」と記載されており、俳優のインタビューには「僕に投げられた人は、本当の柔道五、六段の連中だから…」とあり、また、木村が女優へ柔道の指導を行った様子が記されている。〔『夕刊函館新聞』, 1950年7月11日付〕に掲載された春の潮の広告には、後援として国際柔道協会



写真② プロ柔道家と映画「春の潮」出演者  
出典：『夕刊静岡新聞』，1950年5月24日付

と牛島，木村の名が記載されている。

- 53) 『夕刊静岡新聞』，1950年5月24日付(写真②)。  
54) 『夕刊静岡新聞』，1950年9月24日付(写真③)。  
〔松竹営業本部営業渉外室(1955)，pp.207-208，220，224-225)によれば，この興行に出演した若原，津島，鶴田は当時既にスターとなっていた。
- 55) 池田(1988)，pp.124-127。  
56) 手塚(2000)，pp.20-21。  
57) 『朝日新聞』，1951年6月1日付，〔木村(2001)，pp.162-175〕，『柔道新聞』，1952年7月10日付)。  
58) 池田(1888)，pp.22-24。  
59) この他には，選手がタレント化した事もプロ柔道とプロレスに共通してみることができる。プロ柔道では，柔道家として既に有名だった木村が看板選手として活動していた。木村は，雑誌の表紙，映画出演，プロ柔道以外の興行への参加などを行った。プロレスの中心的な存在である力道山も映画出演や雑誌に掲載，テレビ番組に出演した。つまりプロ柔道とプロレスの双方に，中心的な選手が有名人となり活動し，それを発展の助けとしようとした点が見られる。ただし力道山に比べれば木村の活動は萌芽的であり，十分な活動を行ったとはいえない。
- 60) 旗揚げ戦の集客については，『朝日新聞』，1950年4月17日付)では約4,000名とあるが，〔柔道大事典編纂委員会(1999)，p.379)によれば500名程度であったという。幅のある数字ではあるが，仮に4,000名であったとしても，〔高



写真③ プロ柔道興行の広告  
出典：『夕刊静岡新聞』，1950年9月24日付

橋(1950)，p.11)によれば，同年同所で行われた第3回全日本柔道選手権大会に比べて「問題にならない」ものであったようだ。

- 61) 『読売新聞』，1950年4月17日付)では「予想通り木村七段が初優勝」，同日の朝日新聞では木村が「三，四分で右大外落としから上四方に打ちとりアツケなく優勝」とある。
- 62) 『静岡新聞』，1950年9月3日付)によれば，高野は9月まで会長をつとめている。
- 63) 『毎日新聞』，1950年6月24日付)で，米国柔道協会がラルフ・円福なる人物を介して，プロ柔道家として木村他3名が10月にハワイに来ることが決定したと述べている。
- 64) 『静岡新聞』，1950年9月3日付)，『朝日新聞』，1950年9月23日付)。
- 65) 『朝日新聞』，1950年10月4日付)，『読売新聞』，1950年10月4日付)。「読売新聞」，1951年1月21日付)には，サーカスの一座とピアニストと共にAPL，P・クリーヴランド号で横浜

- からハワイに出発したと記されている。
- 66) 以下の条文の抜粋は、[(1949)『柔道 21巻 1号』, pp.28-29]に掲載されたものから行った。( )内は筆者。
- 67) 嘉納 (1950a), p.26。
- 68) [朝日新聞], 1950年4月17日付, [嘉納 (1950b), p.1]。
- 69) 『朝日新聞』, 1950年4月12日付。
- 70) 嘉履正納 (1950a), pp.26-27
- 71) プロ柔道と占領との関わりについて、牛島 [牛島辰熊先生古希記念会 (1974), pp.161-164] や遠藤 [遠藤 (1982), pp.16-23] はオフリミットの劇場やクラブで柔道のパフォーマンスを行っている。遠藤は柔道の受け身や日本人同士の試合、時には飛び入りのものとも戦うというプロ柔道の興行とも似通った事を行っており、プロ柔道の成立にこのような経験が生かされていた可能性がある。
- 72) 『朝日新聞』, 1950年4月12日付。
- 73) 木村 (2001), pp174-175。
- 74) [『朝日新聞』, 1951年6月1日付], [『柔道新聞』, 1952年7月10日付]。
- 75) 池田 (1988), p.24。
- 76) [『朝日新聞』, 1954年2月7日付] より引用。 [池田 (1988), p.25]。
- 77) [『朝日新聞』, 1951年10月1日付], [『アサヒグラフ1951年10月24日号』, pp.16-17]。
- 78) 池田 (1988), p.22。
- 79) 『柔道通信』, 1952年4月10日付
- 80) 小泉 (2002), pp.254-255
- 81) [小島 (1983), pp.169-175]。筆者所有の静岡市公会堂で行われた「柔道対レスリング拳闘大試合」のピラには市川と、後にプロレスラーとなったユセフ・トルコの名がある。
- 伝], 牛島辰熊先生古希記念会
- 牛島秀彦 (1995) 『力道山 大相撲・プロレス・ウラ社会』, 第三書館
- 遠藤幸吉 (1982) 『プロレス30年初めて言います』, 文化創作出版
- 嘉納履正 (1949) 「全日本柔道手権大会式辞」『柔道 20巻7号』, 講道館
- , (1950a) 「プロ柔道団体と講道館の立場」『柔道21巻2号』, 講道館
- , (1950b) 「全日本柔道選手権挨拶」『柔道 21巻7号』, 講道館
- 亀井好恵 (2000) 『女子プロレス民俗誌一物語のはじまり一』, 雄山閣出版
- 菊間勝彦 (1952) 「レスリングの見方」『労働文化 1952年10月号』, pp.24-27
- 木村政彦 (2001) 『我が柔道』, 学習研究社
- 小島貞二 (1983) 『力道山以前の力道山たち』, 三一書房
- 小泉悦次 (2002) 「女子プロレス 幻の十年」『現代思想 総特集プロレス』, 青土社
- 静岡市役所文書課編 (1954), 『市勢概要昭和28年』, 静岡市役所
- 芝山幹郎 (1981) 「力道山とプロレス元年」『日本風俗じてんアメリカンカルチャー1』, 三省堂
- 下村海南 (1950) 「二十五年の選手権大会」『柔道21巻7号』, 講道館
- 松竹営業本部営業渉外室 (1995) 『キネマの世紀』, 松竹営業本部営業渉外室
- 白崎秀雄 (1987) 『当世崎人伝』, 新潮社
- 柔道大事典編集委員会編 (1999) 『柔道大事典』, アテネ書房
- 鈴木庄一 (1983) 『日本プロレス史 上』, 恒文社
- 高橋武彦 (1950) 「全日本柔道選手権大会を見て」『柔道21巻7号』, 講道館
- 手塚典武編 (2000) 『プロレス記念日』, 日本スポーツ出版社
- 戸松信康 (1975) 「秘話・プロレスとテレビ」『日本プロレス20年史』, 日本テレビ放送網
- 土屋寿山他 (1989) 『ふるさと三島・歴史と人情の町』, 文盛堂書店
- 流智美他 (2002) 「プロレス史の遠近法」『現代思想 総特集プロレス』, 青土社

## 文献・資料

- 池田郁夫編 (1988) 『激動の昭和スポーツ史10 プロレス』, ベースボールマガジン社
- 井上俊 (2004) 『武道の誕生』, 吉川弘文館
- 牛島辰熊 (1950) 「表紙の人」『アサヒグラフ1950年 5月10日号』, 朝日新聞社
- 牛島辰熊先生古希記念会 (1974) 『志士牛島辰熊

- 富田常雄（1950）『春の潮』，日比谷出版社
- 福田定良（1953）「戦後の大衆娯楽」『青年心理第4巻第3号』，金子書房
- 古川岳志（2002）「大衆文化としての力道山プロレス」『力道山と日本人』，青弓社
- ベースボールマガジン社編（1995）『日本プロレス全史』，ベースボールマガジン社
- 毎日新聞社編（1950）『毎日年鑑1950』，毎日新聞社
- 松崎太平（1950）「北海道柔道よもやま便り」『柔道21巻11号』，講道館
- 松下圭一（1960）「大衆娯楽と今日の思想状況」『思想431号』，岩波書店
- 丸島隆雄『講道館柔道対プロレス初対決』，島津書房
- 三島市役所産業課編（1953）『三島市勢概要昭和二十八年版』，三島市役所
- 三島柔道会編（1997）『三島柔道会50周年記念誌』，三島柔道会
- 山内政三（1988）『静岡市の百年 昭和』，静岡市百周年記念出版会
- 山本礼子（2003）『米国対日占領政策と武道教育』，日本図書センター
- 吉見俊哉（2001）「「アメリカ」を欲望／忘却する戦後」『現代思想臨時増刊号第29巻第9号』，青土社
- ，（2007）『親米と反米』，岩波書店
- （1950）「一般柔道競技者（アマ）と職業柔道家（プロ）に関する規程」『柔道21巻1号』，講道館
- （1950）『松竹映画ウィークリー 125号 春の潮特集号』，新世界出版社
- （1950）「プロ，アマの解釈」「プロ柔道」国際柔道協会創立さる」『柔道21巻5号』，講道館
- （1951）「スポーツでショープロレスリング初のお目見得一」『アサヒグラフ1951年10月24日号』，朝日新聞社
- （1954）「プロ・レスラー掲示板」『アサヒグラフ1954年11月3日号』，朝日新聞社
- 『柔道対レスリング拳闘大試合』興行ビラ

Review about Generation of Professional Wrestling  
in Initial Japan in Postwar Days:  
The development of a *Pro Judo* in 1950's

SHIOMI Shunichi \*

**Abstract:** After World War II, professional wrestling became a mass entertainment remaining up to the present time in Japan, but, regarding the generation process of professional wrestling in Japan, the influence of *Rikidozan* and television have been emphasized till now, and other factors are insufficiently emphasized. In this study, I research the process of formation, activities and termination of *Pro Judo* by the *Kokusai Judo Kyoukai*, organized by centering on judo athletes in 1950, then considered about one side of the approval of the professional wrestling in Japan. *Pro Judo* was formed as a mass entertainment by a tie-up with other mass entertainments like cinema and music shows, with a change of the rules for the purpose of showing judo matches to spectators. *Pro Judo* had direct human continuity with professional wrestling. My results suggest the following hypotheses: <1> A direct continuity of *Pro Judo* to professional wrestling was a circuit that imported professional wrestling technique from foreign countries. <2> There was a possibility that exhibition events by *Kokusai Judo Kyoukai* and professional judo athletes performed when *Kokusai Judo Kyoukai* had collapsed laid the groundwork for the spread of professional wrestling in Japan. In other words, in postwar days, some *Budo* (Japanese Martial arts) and *Budo* artists started to spread a mass entertainment that played a constant role in the approval of mass entertainment in Japan, though it was only for a very short period.

**Keywords:** postwar Japan, mass entertainment, *Pro Judo*, professional wrestling, judo

---

\* Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University